

宮本
研

漂泊の俳人 種田山頭火

うしろ姿の
しぐれでゆくか

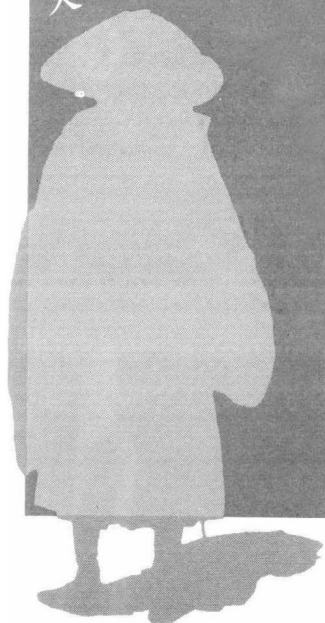


宮本 研

うしろ姿のしくれてゆくか

晩成書房

漂泊の俳人 種田山頭火



著者 ■ 宮本 研 (みやもと・けん)

1926年、熊本県天草に生まれる。北京の日本中学校に学び、1950年九州大学経済学部卒業。高校教員を経て、法務省保護局に勤務。自立劇団麦の会を組織し、サークル演劇のために書いた「ぼくらが歌をうたう時」(1956)で注目される。続いて「反応工程」(1958)、「日本人民共和国」(1960)、「メカニズム作戦」(1962、岸田戯曲賞受賞)、「ザ・パイロット」(1964)などを発表。法務省を辞し、劇作家として独立。「明治の枢」(1962)「美しきものの伝説」(1968)、「阿Q外伝」(1969)、「聖グレゴリーの殉教」(1971)の「革命四部作」を完成させた。

うしろ姿のしぐれてゆくか

一九八六年一〇月二四日 第一刷印刷

一九八六年一〇月二七日 第一刷発行

定価 一二〇〇円

著者 宮本 研

発行者 石原直也

発行所 晩成書房

● 101 東京都千代田区猿樂町一―四―四
● 電話 ○三―二九三―八三四八(代)
● 振替 東京七―七二九〇―

印刷所 株式会社平河工業社

製本所 株式会社三森製本所

装幀 水野 久

乱丁・落丁はお取り替えます

ISBN 4-938180-85-5 C0093

うしろ姿のしぐれてゆくか

登場人物

山頭火

女へんろ

をなごやの女

妹・シズ

妻・咲野

少女

若い娘

女給 1

女給 2

中年の女 1

中年の女 2

芸者たち

声たち

1 プロローグ

闇。

静まりかえっている。

突然——滑車の音がはげしくきしんで、何かが重く水面をたたく。

ロープが落下し、その先端にくくりつけられた釣瓶が大きく揺れている。

尺八——。

闇の中に一人の男が立っている。よれよれの黒い法衣に網代笠、杖、左手に鉄鉢を捧げている。

声 あなたはだれですか。

声 あなたはだれですか。

声 どこから来て、どこへ行くのですか。

声 あなたはだれ。

声 だれのですか。

少女たちの姿が浮かぶ。

少女1 あなたは風ですか。

少女2 あなたは雲ですか。

少女3 それとも——虫。

少女4 草ですか。

少女1 風の中を、

少女2 たった一人、

少女3 肩に蝶々をとまらせて、

少女4 教えてください——

少女たち　あなたはいつたい、どこへ行こうとしているのですか。

男——ゆつくりと背中を向けて、闇の中に消える。

少女1　何のために。

少女2　どこへ。

少女3　何をさがしに。

少女4　どこへ。

少女1　あなたはいつたい、どこへ行こうとしているのです。

少女2　どこへ。

少女3　どこへ。

少女4　どこへ。

少女たちも消えて——

尺八——長く尾を引いて消える。

2 峠の道

斜面。

そこいらに、衣や肌着、脚絆や手拭などが干してあつて——だれもない。木の枝に笠がぶらさがっている。

どこかで鳥の囀り。

鈴の音がして——一人の女へんろがやってくる。へんろ、通りすぎようとして立ちどまり、静かに振りかえる。

女へんろ　どこかそこいらに——どなたかいらっしゃいますのですか。

岩蔭から男が出てくる。上半身が裸。——山頭火である。

山頭火 何か。

女へんろ どこかで水音がいたします。もしよかったら、わたくしにもいただけますでしょうか。

山頭火 お待ちください。汲んでまいりましょう。

山頭火、岩蔭に入り、鉄鉢に汲んでくる。

女へんろ、飲み、ていねいに拭いて返す。

女へんろ お坊様でいらつしゃいますか。

山頭火 ええ。まあ。

女へんろ おいしゅうございました。生きかえった思いがいたします。

山頭火 失礼ですが——お眼がご不自由のようで。

女へんろ ええ、少々。十年ほど前からでございますので、まだ何かと不調法で。

山頭火 でも——こんな山路を、よく、お一人で。

女へんろ 道をさがしますには一人がいちばんでございます。それに——もともとが横着

者、人様のお手などかりましては横着がすぎましようかと。

山頭火　しかし——旅には、雨の日もあれば、風の日だってございます。辛うはございませんか。

女へんろ　淋しくて辛い日や、夜などもございます。でも、それをもとめての旅でもございますので。

腰を上げる。

山頭火　これから、どちらへ。

女へんろ　呼子へまいります。きょうはもう、そこまで。

山頭火　呼子ならわたしもまいります。よろしければ一緒に。

女へんろ　かたじけのうございます。でも、一人で何とか。——この道を行けばよろしいですね。

山頭火　ええ。この道をまっすぐ。ここからは下りになりますのですこしは楽でしょう。

女へんろ　あ。

山頭火　何です。

女へんろ どこからか、潮の香りがただよつてまいます。海が近いのでしょうか。

山頭火 呼子です。呼子は港町ですから。

女へんろ ありがとう。——では。

山頭火 お気をつけて。

去る。

山頭火、見送っているが、やがて、身支度をはじめる。

山頭火 ここは九州。春だというのに肌着が汗ばんだりする。久しぶりにぜいたくをした。洗い物をして、水を飲み、昼寝の夢までむさぼった。——それはそうと、いま、何時だろう。先を急ぐ身ではないが、こんやの泊り代だけは何とかせねば。——呼子にはをなごまちがある。をなごまちの女たちはやさしい。どんなに時化した日でもいくらかにはなる。いつだったか、雪の日、一銭銅貨二枚をにぎりしめて、転びそうになりながら追いかけて来た女がいる。これ、すくないけど、お坊さんに。——そういつて走つて行つた。おれが坊主に見えたのだ。が、そんな日はすくない。たいていは乞食だ。バケツの水をかけられたこともある。坊主と乞食、その日その日のおれの顔だ。——な

かなか、坊主にはなれない。家を出て、ホトケの道を歩みながら、酒は飲む、女は買う、そしていただいてはいけない金と知りながら、その日いちにちのささやかな悦楽にありつきたいばかりに、網笠の中で狐のような目をつぶる。

網笠をかぶり、杖と鉄鉢を持つ。

山頭火　いつまでつづくのか、——しかし、行かねばならぬ。(叫ぶがごとく)ああ、山へ

——空へ——摩訶般若波羅密多心經。

少女たちの声が、歌うように「般若心經」を読みはじめる。

山頭火——力強く、歩きはじめる。

3 港町で

柳の並木。——ここはをなごまちである。

どこからか、少女たちの「般若心経」が聞こえている。

山頭火が来て、一軒の家の前に立つ。

少女が出てくる。少女——茶碗一杯の米を鉄鉢にこぼし、そのまますこし離れて、山頭火を見ている。

山頭火、もう一軒の前に。

中年の女が出てくる。

中年の女 わるいけど、きょうは何にも出ないよ。不景気でサ、こっちが助けてほしいくらいなんだよ。わるいけどサ。ねッ。

ひっこむ。

もう一軒の前。

別の中年の女——

別の中年の女　またかい。やだね。いい加減にしてよ。ただでさえクサクサしてるのに、戸口をふさがれて、お経なんか上げられたら、うつとうしくてやりきれないんだよ。
——さあ、これをやるから、とつとと消えちまいな。

女、大根の一束を頭陀袋につつこんで、入る。

山頭火——大根を手にして、困惑している。

どこからか——口笛の歌。

山頭火、見る。

一軒のをなごやの二階から、一人の若い女が手すりにもたれて、山頭火を見ている。

をなごやの女　あんたもドジだねえ。おもらい、もう何年やつてるんだい。タイミングがわるいんだよ。わあ、すごい、タイミングだなんて。お客に教えてもらったのよ。——いずれにしてもよ、堅気さんのおうちではいま、亭主が帰ってくる前の晩ご飯のお支度。こっちはこっちで、お店を開ける前のテンテコ舞いの最中。だれがおもらいさんの相手なんかしてる暇あるもんですか。それに、この町、このところ不漁つづきだし、そ

うでなくともこの人たち——いい、小さい声でいうわよ。——ケ——チ——な——の
——よ。——わかった。

それまで様子を見ていた最初の家の少女が、家の中に姿を消す。

をなごやの女 聞かれちゃったかな。まあ、いいや。ともかく、あんた、きょうはもうお
しまい。こんやはラジオが夕方から雨になるっていうし、早くどこかのモクチン・ホ
テルにでもひっこまなくちゃ。ほら。上げるわ。すこしだけど——あんた、これで
酒でも飲みなさい。

二階から金を投げる。

女——口笛を吹きはじめる。はやり歌である。

山頭火、腰をかがめて金をひろう。

銀貨だ。

思わず、二階を見上げる。

女の姿は——ない。

4 へんろ宿

裸電球のにぶい光。

壁に山頭火の法衣や笠がかかっている。

山頭火が宿の浴衣に手拭いをさげて入ってくる。

雨だ。

山頭火、思案を断ちきるように、壁の法衣に手をのばす。

若い女中がくる。

若い女中 あのを。

山頭火 何だい。

若い女中 お坊さんにぜひお目にかかりたいとおっしゃる方がおられて、ご都合をうかがってほしいと。